



IBD(炎症性腸疾患)センターが開設されました

潰瘍性大腸炎・クローン病という病名を御存知でしょうか？潰瘍性大腸炎は大腸に潰瘍ができ、血便・下痢・腹痛などを認めます。クローン病は小腸・大腸に潰瘍が、肛門に痔瘻（じろう）ができ、下痢・腹痛・肛門の痛みなどを認めます。いずれも小児～若い方に多く発症し慢性的な炎症を繰り返すことが特徴的で、治療法が増えてはいるもののすべての患者さんに効く治療法はなく、時には重症化し手術を必要とすることもあり、厚生労働省の難病に指定されています。この二つの病気を含めて炎症性腸疾患、IBD (Inflammatory Bowel Disease) と呼ばれています。

当院では数十年前よりたくさんのIBDの患者さんの治療を行っており、現在では約260名の潰瘍性大腸炎の患者さんが、約120名のクローン病の患者さんが治療を受けています。この他にも治療が功を奏し、病状が改善した多くの患者さんがおられ、かかりつけの医療機関様にその後の治療をお願いしています。

IBDの診療には小児科・消化器内科・消化器外科の協力が必要不可欠であるだけでなく、看護師・薬剤師・栄養士・地域連携室・ソーシャルワーカーの連携も重要です。部署を越えて「チーム県中」として協力するために、

これらのスタッフが集まって香川県立中央病院 IBDセンターを設立しました。IBD患者数の増加もあり全国でIBDセンターが発足していますが、四国での本格稼働は当院が初めてとなります。

院長補佐・消化器内科診療科長の稲葉が、IBDセンター長を務め、消化器内科部長の高橋が、副センター長・データマネージャーとしてIBD患者さんの発症からの経過や検査や手術などの情報をまとめ、内科診療を統括します。消化器外科部長の大谷が、副センター長としてIBD患者さんの外科診療を、小児科部長の岡本が、小児IBD患者さんの診療を統括します。

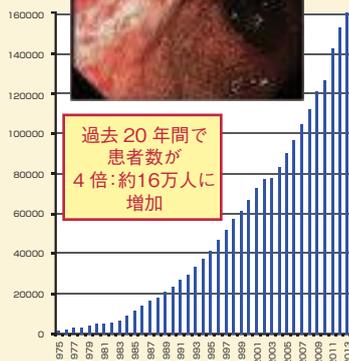
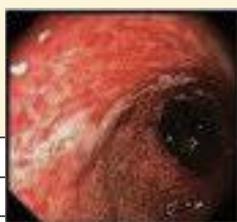


現在も多くの新薬の治験（患者さんの協力により保険診療で使用できる前の薬の効果を評価する研究）を行っており、従来の治療が効果不十分で治療に困っている患者さんにとっての希望となっています。多くの患者さんの協力が得られ、治験の完遂率は全国でもトップクラスです。

学会活動も積極的に行っており、2月にオーストリア ウィーンで開催された IBDの国際学会（ECCO）では、高橋が「潰瘍性大腸炎に対する免疫抑制薬のタクロリムス治療における血球成分除去療法の上乗せ効果」に関する演題を発表しました。

今後、岡山大学病院 IBDセンターとも連携し、治療に難渋する患者さんの治療方針の検討なども行っていく方針です。香川県はもとより、四国のIBD患者さんに少しでも貢献できればと考えています。

潰瘍性大腸炎



過去20年間で
患者数が
4倍：約16万人に
増加

クローン病



過去20年間で
患者数が
4倍：約4万人に
増加

(患者数は医療受給者証・登録者証 交付件数、難病情報センターホームページより)

DPC特定病院群の指定を受けました

厚生労働省から、平成30年度～31年度におけるDPC対象病院の医療機関群の指定があり、本院は、引き続き、大学病院本院に準ずる診療機能を有する病院として、「DPC 特定病院群（従来のⅡ群）」の指定を受けることができました。

この指定は、「診療密度」「医師研修の実施」「高度な医療技術の実施」「重症患者に対する診療の実施」という4項目に関するこれまでの実績に基づいて評価されるものです。この場をお借りしまして、患者紹介などの面でご支援をいただいている地域医療機関の皆様へ、厚くお礼を申し上げます。

今後とも、地域医療に貢献できるよう、診療機能の充実などに努めて参りますので、引き続き、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

中央NEWS

感染症病棟にて訓練

12/18 を行いました (院長補佐 川上 公宏)

第1種感染症指定機関として平成29年3月に運用を開始した感染症病棟で、感染症疑い患者の受け入れ訓練を行いました。

訓練の概要は以下の通りでした。

想定：「香川県〇〇市在住のエボラ出血熱の危険地域より渡航帰りの方で、発熱してエボラ出血熱が疑われる」



- (1) 情報伝達訓練として、保健所よりの当院への連絡、院長と感染症医師により患者受け入れ決定、感染症病棟運営委員会の開催し、緊急医療チームの確認と方針の周知徹底。
- (2) アイソレーターを使用して救急車に保健所スタッフが同乗、〇〇市より香川県警誘導のもと、中央病院感染症病棟へ移送。
- (3) 感染症病棟への受け入れを行い、防護服を着用して患者を病室に搬入。
- (4) アイソレーターからベッドに移動、採血・レントゲン検査。
- (5) 検体の国立感染症研究所への輸送。

ビデオを見ての振り返りと、受け入れ実績のある他施設のスタッフの講評を確認して終了しました。今後も県内の他医療機関の参加も含めた訓練を実施予定です。

中央NEWS

医療セミナーを開きました

3/15



3月15日(木)、本院講堂において「遺伝性乳癌・卵巣癌症候群について」と題して、医療セミナーを開催しました。

講師は乳癌・内分泌外科の小笠原部長でした。参加者は医師等58名で、そのうち院外からも34名の先生方にご出席いただきました。

今後も、当院における医療を紹介するため、興味ある様々なテーマを取り上げて、皆様のお役にたつ医療セミナーを積極的に開催していく予定です。是非ご参加ください。

中央NEWS

ほっと一息やすらぎタイム ミニコンサート

2/28

を開催しました



関西を中心にライブ活動を行ってられるピアノ弾き語りシンガーソングライターの松中啓憲さんをお招きし、院内コンサートを開催しました。松中啓憲さんはH28年9月にも院内コンサートに来ていただいたことがあり、今回が2度目のコンサートでした。

テレサテンさんの名曲「時の流れに身をまかせ」から始まり、森山良子さんの「涙そうそう」、中島みゆきさんの「糸」、松中さんのオリジナル曲「ありがとう」など全7曲のピアノ弾き語りに皆さん聞き入っておられました。

アンコールでは坂本九さんの「上を向いて歩こう」を会場の皆さんと楽しく一緒に歌うことができ、良い思い出となるミニコンサートとなりました。

退職のご挨拶



山ノ井 昭
検診センター センター長

今年3月で退職となりました。思えば月日の流れは早いものです。昭和53年3月に大学を卒業して、その後、昭和59年4月より、香川県成人病センター（県立中央病院と兼務）でお世話になりました。成人病センターは主に胃癌検診の精密検査施設であり、主に胃内視鏡を中心とした診療に従事しておりました。それから、平成2年8月より、新しく設立された郷東町の香川県立がん検診センターへ移りました。平成26年4月には、検診センターの廃止に伴い、県立中央病院検診センターにお世話になっています。

このたび退職となりましたが、都合によりもうしばらく検診センターでお世話になります。よろしく願います。

退職のご挨拶



馬場 敏
放射線部 前技師長

1979年春、高松港に着岸する宇高連絡船から棧橋を見下ろす目に飛び込んできた看板の文字「青い四国へ ようこそ」。今でも覚えている数少ない記憶の一つです。四国のなにが青いのか？と思いついたのは「空と海」。ごく普通の印象でした。これが弘法大師さまとの関係を意味していたかどうかは定かではありませんが、とにかく就職という人生の一大イベントの始まりでした。

当時、診療放射線技師の仕事といえばX線フィルムを使っただけのX線撮影が主流で職人芸的作業でした。経験豊富な先輩技師の神業的な仕事を目の当たりにして、早く一人前にならなければと焦っていたあの頃…。あれから39年、驚異的なコンピューター技術革新によってX線フィルムは駆逐され、職人技を発揮する場面もほとんどなくなってしまいました。これからは患者さんとの対話時間を増やし、優しさと思いやりの技を磨いていくことが肝要かと考える今日この頃です。

青い空と海に囲まれた香川で人生の半分ほどお世話になりました。生かされているという感謝の気持ちを忘れることなく、これから起こる数々の人生イベントを素直に受け入れ、心穏やかに過ごせればと考えております。

長い間大変多くの皆様にお世話になり、感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。今後は香川県に暮らす一人として、皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

退任のご挨拶



宮川 真澄
薬剤部 前薬剤部長

病院薬剤師として37年間、医療職のなかでも病院薬剤師ほどその仕事の内容が変わった職業はないと思います。就職したころは、1日約千枚の処方箋の調剤をいかに正確に早く行うかが課題でしたが、10年がたったころから外来は院外処方となり、病院薬剤師の仕事は病棟での仕事にシフトしていきました。患者さんへのお薬の説明のほか、治療効果や副作用のチェック、医師・看護師への薬剤情報提供など、今では仕事の3分の2は病棟での業務となりました。患者さんの最適な薬物治療に薬剤師が責任を持つとの気概を持って日々取り組んでいます。

5年前に薬剤部長に就任した後は、ちょうど1年目に新病院への移転、最後の1年には病院機能評価受審、特定共同指導など、大きな課題にも直面しました。その都度薬剤部の職員はすばらしいチームワークで全力投球、医師、看護師はもちろん他の医療職や事務職の方々とも協力し、病院全体の力を合わせて成果を上げることができました。みなさまのご支援ご指導のおかげと感謝いたしております。

みなさまのご支援ご指導のおかげと感謝いたしております。

それぞれの職種がその職能を十分発揮し、垣根を作らず、相互に連携して、患者さんとともに患者さんのためのチーム医療を目指す、香川県立中央病院はそのような真の意味でのチーム医療を実践できる病院だと思っています。みなさまのご活躍を心よりお祈りします。

検査のはなし 「微生物検査について」

中央検査部の仕事

中央検査部 副技師長 平内 美仁

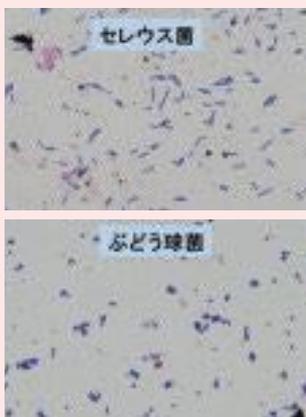
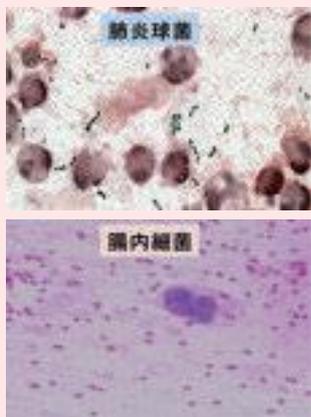
臨床微生物検査とは、感染症の診断および治療のために、血液、尿、喀痰、糞便などから原因となる微生物を検索し、有効と考えられる抗菌薬を検査することです。そのためには、適確に検体が採取され、それに応じた適切な検査が行われる必要があります。システム化や機器による自動化は進んでいますが、グラム染色などの鏡検や培養判定、結果の解釈は、臨床検査技師の技術と知識、経験が不可欠です。近年、各種遺伝子検査や質量分析を利用した新しい検査の開発により、微生物検査も変わりつつあります。

微生物検査室は、院内で検出される微生物検査情報が最も早く得られ、院内全体の微生物検出情報をまとめて把握できる部署でもあります。香川県立中央病院では、検体を24時間受け付け、インフルエンザ抗原検査等については迅速報告し、大腸菌などの一般細菌検査については、培養を開始し、4名の微生物担当技師で365日対応しています。

迅速、正確、柔軟に対応できるよう心がけていますので、今後ともよろしくご協力ください。

グラム染色

材料をスライドガラスに塗り染色し、細菌・白血球・細胞などを確認します。



培養検査

材料・検査目的に応じ培地を選択し、さまざまな条件下で培養します。(炭酸ガス培養・嫌気培養など)



医師の人事

異動

転入

(1月1日付)



三野 智

脳神経外科

香川大学出身
(平成27年卒)
趣味/スポーツ

フットワーク軽く、
誠心誠意努めてまいります。
今後ともご指導ご鞭撻の程
宜しくお願ひします。

転出

(3月31日付)

- 石田 正也 (消化器内科)
- 廣瀬 一樹 (整形外科)
- 中村 仁 (麻酔科)
- 倉岡紗樹子 (消化器内科)
- 鈴木 優之 (消化器・一般外科)
- 松田 力哉 (麻酔科)
- 豊澤 惇希 (消化器内科)
- 松原 慧 (呼吸器外科)
- 松本 憲一 (歯科・口腔外科)
- 坂井健一郎 (呼吸器内科)
- 山野井友昭 (泌尿器科)
- 大平 純也 (研修医)
- 川崎 賢祐 (乳腺・内分泌外科)
- 田中 茂登 (眼科)
- 白川 拓 (研修医)
- 須藤 雄也 (循環器内科)
- 矢野 肇子 (産科・婦人科)
- 竹内 雄亮 (研修医)
- 原 翔平 (循環器内科)
- 茂原 研司 (小児科)
- 谷 勇輝 (研修医)
- 末澤 孝徳 (心臓血管外科)
- 植月 元一 (小児科)
- 重信 有希 (研修医)
- 高尾真一郎 (整形外科)
- 井上 大作 (放射線科)
- 松尾 聡子 (研修医)